

2.3.4. 協定校訪問、協定校主催の催し

コンソーシアム科目、ワークショップと並んで、本事業の柱となる協定校訪問は、本学の学生が協定校を訪問し、当該大学の教員・大学院生と意見交換を行いつつ共同研究を推進する目的で行われた。ほとんどの場合は、本学教員が同行し、コンソーシアム科目の内容と構成、学生の共同研究に対する指導等について、協定校教員と詳細な打ち合わせをし、講義や研究発表、当該大学学生の研究指導も行った。以下に訪問時の活動を報告する。

[台湾・国立清華大学訪問]

言語学領域の最初の協定校訪問は、2007年3月9日～12日に行われ、本学大学院生2名（瀧田健介氏、渡邊恵理子氏）と教員2名（斎藤衛教授、藤井友比呂囑託講師）が台湾・国立清華大学を訪問した。3月9日、名古屋を出発し台北空港に降り立った一行は、台北から1時間弱の清華大学キャンパスのある新竹市に向かい、滞在先である Berkeley Business Hotel に入って、清華大学の主催する Nanzan-Tsinghua Consortium のイベント ("Informal Workshop on Formal Syntax" および "Forum on Object Fronting") に備えた。



3月10日のワークショップは、清華大学 W.-T. Dylan Tsai 教授の挨拶と斎藤教授による名詞句の日中語比較研究に関する発表に始まり、清華大学院生 Liching Livy Chiu 氏の中国語動詞 *gei* の語彙意味論に関する発表が続いた。その後、本学大学院生・瀧田健介氏の中国語と日本語の語順に関する論考、本学大学院生・渡邊恵理子氏の第二言語獲得研究（本学大学院生・富士千里氏、加太良枝氏、村杉恵子本学教授との共同研究）が発表された。3月11日のフォーラムでは W.-T. Dylan Tsai 教授、清華大学院生 Barry C.-Y. Yang 氏を中心に全体ディスカッションが行われ、目的語前置に関して日中語の詳細な比較がなされた。12日朝、本学からの参加者は台北空港から名古屋への帰途についた。

斎藤教授の発表は、本学村杉恵子教授、清華大学 T.-H. Jonah Lin 教授との名詞句内主要部パラメーターに関する共同研究に基づくものであり、日中語比較の共同研究の一つのモデルを示すものであった。また、瀧田氏の発表は、Lin 教授の中国語分析を基礎とした日中語比較研究を通して、文構造における主要部パラメーターについて論じたものであり、清華大学と本学の協力体制が有効に機能していることを窺わせた。瀧田、渡邊両氏は、*wh* 構文の日中語比較等について、清華大学の大学院生と議論を重ねることができ、訪問の本来の目的である共同研究の推進においても大きな成果があった。



[アメリカ・コネチカット大学訪問]

アメリカ・コネチカット大学訪問（2007年3月24日～31日）は、いわばアメリカにおけるコンソーシアム科目の様相を呈した。本学からの参加者は、瀧田健介氏、富士千里氏の両大学院生と、村杉恵子教授、藤井友比呂嘱託講師の教員2名であった。3月24日に名古屋を出発し、同日コネチカット州ハートフォード空港に到着した一行はそのままスターズキャンパスへ向かった（滞在先はキャンパス内の宿泊施設 Nathan Hale Inn）。25日に一部教員および大学院生と顔を合わせ、学科主催歓迎会を含む滞在中の予定を確認した。

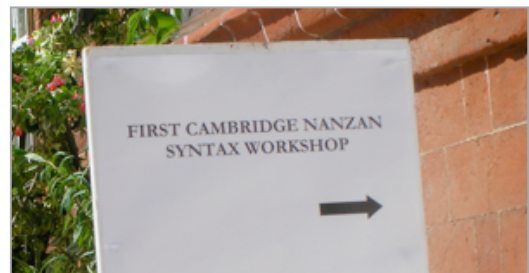


本学大学院生は、コネチカット大学言語学科のすべてのイベントに参加する許可を与えられ、コネチカット大学の大学院生とともに、言語学科と心理学科の共同ディスカッション（Diane Lillo-Martin 教授他担当、3月26日）、語順と量子子の作用域に関する統語論セミナー（Jonathan Bobaljik 教授, Susi Wurmbrand 教授担当、3月27日）、統語論入門コース（Željko Bošković 教授担当、3月27日、29日）、言語獲得セミナー（Diane Lillo-Martin 教授、William Snyder 教授担当、3月28日）、意味論セミナー（Yael Sharvit 教授、Jon Gajewski 教授担当、3月29日）、そして博士資格論文執筆のための研究指導（Bošković 教授担当、3月29日）に出席した。また同時期にコネチカット大学では、斎藤衛本学教授による連続講演が行われており、本学訪問グループも、同大学教員、大学院生とともに出席したため、連続講演は実質的なコンソーシアム科目となった。

本学訪問グループが特に深く関わった活動として、上述の言語獲得セミナーにおいて、富士氏と村杉教授がそれぞれゲスト講師として参加したことが挙げられる。富士氏は日本手話の基本的特質を紹介し、村杉教授は日本語獲得において比較的遅い年齢で獲得される文法事項について講義した。また、本学大学院生は、言語獲得実験室でコネチカット大学の大学院生の協力のもとアメリカ手話表現のデータ収集を行い、また研究上関心の近い研究者と面談し、議論するなど一週間の滞在期間を有効に活用した。さらに、村杉教授はコネチカット大学の学生からの要望に応え、個別の研究指導も行った。3月30日ハートフォード空港から飛び立った一行は、翌日3月31日に名古屋に到着した。

[イギリス・ケンブリッジ大学訪問]

イギリス・ケンブリッジ大学への訪問は、2007年4月30日から5月2日の日程で行われた。参加者は、須川精致氏、瀧田健介氏の大学院生2名と、村杉恵子教授、斎藤衛教授、鈴木達也教授、藤井友比呂嘱託講師であった。4月30日に名古屋を出発し、同日イギリス・ヒースロー空港に到着した一行は、そこからケンブリッジ市に移動した（滞在先は市内 Lensfield Hotel）。



ケンブリッジ大学では、到着の翌日（5月1日）から同大学主催で、第1回ケンブリッジ-南山統語論ワークショップが開催され、一行はこのワークショップに参加した（プログラムは2.2を参照）。ケンブリッジ大学 Ian Roberts 教授の開会の挨拶で始まり、ケンブリッジ大学言語学科と共同でプロジェクト



を行っているニューキャッセル大学の Anders Holmberg 教授がフィンランド語の疑問接辞について発表した。その後、本学の鈴木教授が動名詞の構造について、藤井囑託講師が非義務的制御について、ケンブリッジ大学研究員 Theresa Biberauer 氏がいわゆる拡大投射原理について、最後に斎藤本学教授が適正束縛条件について、それぞれ研究発表を行った。

ワークショップ終了から5月2日にかけては、ケンブリッジ大学の大学院生がリーダーシップをとり、カレッジ・ディナー、言語資料の交換、共同研究のための個別討議等、充実したスケジュールが組まれた。また、ケンブリッジ大学訪問に際し、同大学言語学科は、そのウェブサイトに本事業に基づく本学との活動を大きく紹介するページを設けるなど（詳しくは3.1を参照）、協力を惜しまなかったことも付記したい。



[イタリア・シエナ大学訪問]

イタリア・シエナ大学への訪問は、ケンブリッジ大学訪問につづいて5月3日から7日の日程で行われた。5月3日、フローレンス空港で、大学院生・須川精致氏、同・瀧田健介氏、村杉恵子教授、斎藤衛教授、鈴木達也教授、藤井友比呂囑託講師に大学院生・伊藤敦司氏が合流し、シエナ大学のあるシエナ市に移動した（滞在先は学内の宿泊施設 Collegio Santa Chiara）。

訪問先であるシエナ大学・認知科学言語研究センター（Centro Interdipartimentale di Studi Cognitivi sul Linguaggio）では、到着日翌日から二日間（2007年5月4日～5日）にわたって「ロマンス語・日本語ワークショップ：比較統語論と言語獲得」が企画・開催された。ケンブリッジ大学の Ian Roberts 教授、シエナ滞在中のコネチカット大学 Andrea Calabrese 教授に加え、イタリア各地から参加者があり、40名規模のワークショップであった。本学からは、大学院生の伊藤敦司氏が日本語の敬語現象について、瀧田健介氏が日中語比較統語論について口頭発表を行った。瀧田氏の発表は、3月の清華大学訪問時の発表を、清華大学の研究者

との討議を通してさらに深めたものであり、コンソーシアムの成果を具体的に示すこととなった。シエナ大学からは、大学院生 Simona Matteini 氏がドイツ語名詞句の第二言語獲得について、そして Valentina Bianchi 教授が逆行照応現象における焦点化の役割について論考を発表した。

また、コンソーシアム教員として、斎藤衛教授、村杉恵子教授、ケンブリッジ大学 Ian Roberts 教授、コネチカット大学 Andrea Calabrese 教授も各々発表を行った。斎藤教授は、日本語の「第一位置効果」と呼ばれる現象について考察し、村杉教授は、ある言語の獲得過程に現れる中間段階の文法が他言語の大人の文法に類似する事を、1980年代から積み重ねてきた日本語獲得研究から具体的に示した。Roberts 教授はいわゆる動詞第二位現象について、Calabrese 教授は外来語認識の音韻論的側面についてそれぞれ発表を行った。シエナ大学の Rizzi 教授と Belletti 教授は、発表にコメントを加えつつ、全体討論の司会を務めた。ワークショップ終了後の5月5日午後には、シエナ大学と本学の大学院生が、文左方周縁部の意味解釈についてイタリア語と日本語の比較を行い、共同研究を進めるにあたってのそれぞれの課題を確認した。2月のシエナ大学、コネチカット大学とのコンソーシアム科目に端を発したこの共同研究は現在も続けられており、近い将来に成果が公刊される予定である。現地時間5月6日早朝シエナを出発し、フローレンスからフランクフルトを経て、5月7日に帰国した。



[インド・ハイデラバード国立言語研究所訪問]

2008年1月23日から28日の日程で、本学大学院生の伊藤敦司氏、瀧田健介氏、上田平安氏が協定校インド・EFL大学（ハイデラバード国立言語研究所 CIEFL が改称）を訪問した。一行は23日、中部国際空港から、シンガポール・チャンギ空港を経由して同日夜遅くハイデラバードに到着した（宿泊先はEFL大学が用意した STAY INN）。24日は、ハイデラバード国立言語研究所の大学院生、若手研究員、協定校ケンブリッジ大学の Ian Roberts 教授と同大学研究員 Theresa Biberauer 氏と合流し、翌日から始まる3



大学合同セミナーの打ち合わせを行った。

セミナーは、25日から三日間にわたって「比較統語論と言語獲得」をテーマに開催され、共同研究と調査のために現地に滞在していた本学の斎藤衛教授、デリーの研究者も含め、約40名の参加があった。本学大学院生の研究発表は3件であり、伊藤氏が主題役割位置への移動と遊離数量詞現象について、瀧田氏が循環的線形化により適正束縛条件を説明する試みについて、上田氏が協定校清華大学との共同研究の中で生まれた複数表現と名詞句構造に関する日中語対照研究について発表した。討論では、上記のそれぞれの研究について、インドの言語から関連する現象が示され、これまで清華大学と行ってきた日中語比較研究を、インド諸語を含むより大きなプロジェクトに拡大する可能性が明確になった。

26日には、EFL大学副学長主催のレセプションがあり、EFL大学が今後もコンソーシアムの活動を支援し、アジアにおける理論言語学の発展に寄与していくことが表明された。なお、今回の訪問についても、EFL大学が本学の大学院生と教員の滞在費をすべて負担した。一行は27日夜遅くハイデラバードを発ち、シンガポール・チャンギ空港を經由して関西国際空港に降り立ち、新幹線で名古屋に戻った。



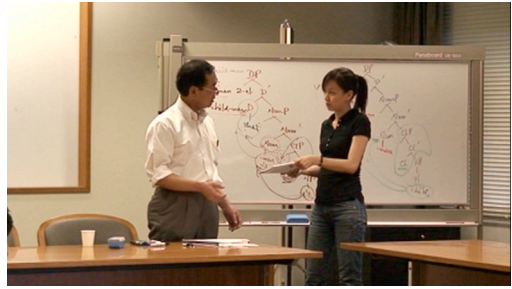
2.3.5. 協定校からの働きかけ

以上紹介したワークショップ等のイベントは、協定校訪問のさいに当該協定校によって行われた催しであるが、協定校訪問と全く独立して協定校によって企画・運営された催しがあった。ここに2件紹介する。

[国立清華大学による南山大学訪問]

2007年7月20日～24日には、国立清華大学からT.-H. Jonah Lin教授、大学院生 Liching Livy Chiu氏、Barry C.-Y. Yang氏の3名が、清華大学の研究費補助を得て本学を訪れた。これを受けて、本学は清華大学とのワークショップとしては第4回目となる合同ワークショップを開催した（プログラムについては、2.2を参照のこと）。ワークショップ一日目は、Lin教授の中国語の文構造、特に同言語ににおいて時制が存在するという主張を中心においた法助動詞および制御動詞構文に関する研究発表で始まった。Chiu氏はつづいて中国語のスルーシ

グ構文においてみられる島効果消失と先行節の形式との関係に関する発表を行った。その後、斎藤衛本学教授を中心にディスカッションが行われ、日本語の複数を表す形態素「たち」とそれと類似した中国語の *-men* に関する対照研究が共同研究用のトピックとして検討された。この研究はその後、本学大学院生・上田平安氏と本学科目等履修生・原口智子氏



によって遂行され、前述の EFL 大学における合同セミナー、後述する清華大学におけるコンソーシアムシンポジウム（2007年12月）で論文が発表されることになる。

ワークショップ二日目は、本学大学院生・瀧田健介氏が適正束縛条件に関する研究を発表し、同条件は循環的線形化 (cyclic linearization) の帰結として捉えられるということを主張した（この発表は、2007年10月カナダで行われた学会 NELS（北東部言語学会）での同氏の発表の基礎となった。3.2.2 参照）。瀧田氏に続き、清華大学院生の Yang 氏が *wh* 構文における介在性効果に異なる二つのタイプが存在することを示す研究を披露した。最後に藤井友比呂本学嘱託講師が、分離不可能所有について、所有者名詞句、被所有者名詞句の文内での生成のされ方を検討する研究を発表した。

二日目も、研究発表終了後、全体でディスカッションが行われ、瀧田氏と Yang 氏は、*why* に当たる疑問詞が別の *wh* 句と共起するケースについて日中語比較研究を深化させ、本学大学院生・須川精致氏、清華大学院生 Chiu 氏、藤井友比呂本学嘱託講師が日中語のスルーシングに関する共同研究を進めた。また、本学大学院生・富士千里氏、渡邊恵理子氏は、本学の村杉恵子教授、斎藤衛教授、



青柳宏教授、清華大学の T.-H. Jonah Lin 教授の指導のもと、分離不可能所有名詞構文の日中語比較に関する基礎データを吟味した。清華大学訪問者滞在最終日の午前中（24日10:00～12:00）は、清華大学参加者と本学教員・大学院生が参加して、ワークショップ二日目に行ったグループ・ディスカッションの成果をまとめた短いプレゼンテーションを中心とした会合を持ち、全日程を終了した。瀧田氏と Yang 氏は、2007年12月に香港で開催された第6回 Asian GLOW（アジア理論言語学会）で発表する共著論文（3.2.2 参照）をここでほぼ完成させている。

[台湾・国立清華大学主催によるコンソーシアム協定シンポジウム]

2007年12月15日～17日、清華大学が、言語学領域コンソーシアム協定校6校の大学院生や教員を招聘して、シンポジウム "International Symposium of the Cambridge-Connecticut-Hyderabad-Nanzan-Siena-Tsinghua Consortium for Linguistics (劍橋-康乃迪克-海得拉巴-南山-西恩納-清華六校語言學聯盟國際學術研討會)" を開催した（実行委員：Feng-Fu Tsao 清華大学教授、Yueh-Chin Chang 清華大学教授、W.-T. Dylan Tsai 清華大学教授、斎藤衛本学教授、

村杉恵子本学教授、Hun-Tak Thomas Lee 香港中文大学教授、Kuang Mei 清華大学教授、Chin-Fa Lien 清華大学教授)。このシンポジウムは、National Science Council of Taiwan、Ministry of Education of Taiwan、College of Humanities and Social Sciences, National Tsing Hua University の補助金 (Yueh-Chin Chang 教授、W.-T. Dylan Tsai 教授が申請) によって実現したものである。本学の大学院生 2 名 (富士千里氏、瀧田健介氏) と教員 3 名 (斎藤衛教授、村杉恵子教授、藤井友比呂嘱託講師) の訪問に関わる費用の大部分について清華大学が負担し、教員 1 名 (有元将剛教授)、大学院生 1 名 (上田平安氏) の宿泊費に関しても、清華大学より補助があった。



12 月 13 日に名古屋を出発し、夕刻台北国際空港に到着した南山大学からの一行は清華大学キャンパスのある新竹市に移動し (滞在先: Berkeley Business Hotel)、清華大学 Yueh-Chin Chang 教授、T.-H. Jonah Lin 教授らの歓迎を受けた。14 日は清華大学キャンパスにおいて、コネチカット大学からの訪問者



(William Snyder 教授、大学院生・大滝宏一氏) と合流し、清華大学の教員、大学院生らを変えて、統語論グループと言語獲得グループに分かれて約 2 時間半にわたってディスカッションを行った。その後、ケンブリッジ大学、ハイデラバード国立言語研究所、シエナ大学からの訪問者と合流し、清華大学の企画したレセプションに参加した。

15 日から三日間にわたって開催されたシンポジウムでは 21 件の口頭発表、10 件のポスター発表、3 回のディスカッション・セッションが設けられ、100 名近い参加者があった。本学からの参加者は、口頭研究発表、ディスカッション・セッションへの参加という形で、共同研究の可能性を探った。上田氏は 15 日に複数マーカーの日中語比較研究に関する本学科目等履修生・原口智子氏との共著論文を発表し (p.52 参照)、瀧田氏は斎藤教授と共に vP 左端への移動に関する論文を 16 日に発表した。富士氏は相要素の獲得に関する村杉教授との共著論文を 17 日に発表した。上田氏、原口氏による研究は、2007 年 7 月に清華大学院生が本学を訪問した際のディスカッションに端を発したものである。今回の訪問では、Lin 教授、斎藤教授の指導の下で、上田氏が清華大学院生 H.-C. Joyce Tsai 氏とともに、論文をさらに発展させるための共同研究を開始した。富士氏と村杉教授の研究は、コンソーシアムワークショップにおいてすでに発表されている本学



大学院生・青野ますみ氏の愛媛方言に基づく相に関する統語的研究 (p.75 参照) を言語獲得理論の中で捉え直した上で、普遍的仮説を提示して、言語比較の共同研究を可能にするものであった。また、瀧田氏と斎藤教授による研究も、動詞句左方周縁部に関するイタリア語、マラヤラム語との比較を射程に入れて、日本語分析から普遍的仮説を提示している。

本学教員は、発表者としてのみならず、シンポジウム実行委員、また司会者としても本シンポジウムの開催に貢献した。村杉教授は、ディスカッション・リーダーとしてコネチカット大学 William Snyder 教授とともにディスカッション・セッションを担当した。この中で、語順の獲得に関するシエナ大学との共同研究、中間文法に関するコネチカット大学との共同研究が提案され、非常に実りあるシンポジウム参加となった。斎藤教授と藤井囑託講師は18日に、有元教授、村杉教授、瀧田氏、富士氏、上田氏は19日にそれぞれ帰国した。



2007年2月21日 6大学協定締結記念シンポジウムの会場の様子